
仮題「シャングリラ」第二章

月読天舞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仮題「シャングリラ」第二章

【Nコード】

N5340C

【作者名】

月読天舞

【あらすじ】

あれから3ヶ月。リーンを失ったリューヤが新たな運命の中に巻き込まれていく。リューヤは失われた物を取り戻す事が出来るか？

第1話「不穏な気配」(前書き)

過激な表現等があります。あしからず

第1話「不穏な気配」

あれから3ヶ月が経ち、リユーヤの心は少しか回復していた。リン・サンドライトを失った悲しみがあまりに大きかった為、リユーヤの心はそれを奇妙な形で受け入れ始めていた。

リユーヤは、リンが死んだという事実を受け入れてはいたが、それを実感として感じれない状態が続いていた。いつかひょっこりと帰って来て笑顔を見せるのではないかと、そんな気持ちのまま、リンの死を中途半端な状態に置いていた。

食事はとるようになり、紫炎教の信者に混じって訓練を行うようにもなっていた。一人でいればリンの事を思い出し、堪らないきもちになるので、多人数の訓練に混じって気持ちを晴らしていたのだ。

戦闘訓練の中で面白いと思ったのは「合気道」という日本特有の武術だった。相手の力を利用しそれによってダメージを与えるというその技術体系は素晴らしい物だった。その技術を実戦で使うには、凄まじい技術と能力が必要である事は見てとれた。余程LV差が無い限り不可能と思える技も数々ある。それでもリユーヤは、それを必死で覚えた。リンの事を忘れようという気持ちもあったが、紫炎教本部を取り巻く異様な気配が、リユーヤに一段高い技術を身につける事を強要していた。

合気道の上級の技は、その殆どが約束事のうちにしか出来ない（LV差が大きければ別だが）ようなものばかりだった。だが、リユーヤには事前に相手の動きや気配を読めるという強みがあり、それを実戦レベルで身に付ける事に成功した。

「リユーヤ様」

「紫炎様が」

「お呼びです。」

訓練に明け暮れるリユーヤに唐突に鈴と鋼が言った。その声を聞

いて、リユーヤは訓練を止めタオルを取った。

「すぐに行く。」

リユーヤは汗を拭きながらそう応えた。

「クライ王国の 能力者リユーヤ・アルデベータは日本の紫炎教本部に潜伏している模様です。」

ブロンドの髪長い女が、大仰な椅子に座っている軍服姿の男に對してそう言った。男の胸には幾つもの勲章がぶらさがっている。

男は將軍といったところだろうか？代わって女の軍服には、少尉を示すバッチが輝いていた。

「ふむ。それで、リユーヤ・アルデベータとは接触出来そうかね？」
老境に入ろうとする將軍は、物静かな調子でそう言った。

「は！可能であるとは思われませんが、我々以外にも紫炎教を監視している機関があります。その機関の目を盗んでは難しいかと・・・」

「構わんよ。我々の目標の第一段階としてはリユーヤ・アルデベータと接触する事だ。どこにも知られぬに越した事はないが、シエンやリユーヤ・アルデベータ、リーン・サンドライトの事を既に知っているものに知られた所で大局に変化は無い。」

「は！」

「ついでには、君に日本へ直接飛んで欲しい。」

男はあくまで落ち着いた調子で言った。

「は！」

「私の意を知る者にリユーヤ・アルデベータと接触してもらいたいのだよ。君は私の秘蔵っ子だ。頼むぞ。」

「分かりました。お任せください。」

ブロンドの髪は女はそう言って敬礼した。

第2話「力」

「なんの用だ？」

紫炎のいる講堂に入ったリユーヤは開口一番そう言った。

「少しは元気になれましたか？」

紫炎は柔和な笑みを浮かべ優しく言った。

「そうだな・・・一時程落ち込んではいないよ。リーンが残してくれた命を大切に使わなけりゃならない・・・今はそう考えてる。」

「そうですか。ようやくあなたも、前を向けるようになったんですね・・・」

「そうでもないさ。」

リユーヤは腕組をして静かに言った。

「正直に言えば、夜眠る前や一人にいる時、どうしようもない寂しさを感じる事がある・・・愛する者の消えたこの世で生きていく価値があるのか？・・・と考えて死にたくもなる事もある。」

「それでも、生きる覚悟はしているんですね？」

リユーヤは試されるかのような質問にうんざりしたが、あれからここまで面倒を見てくれた紫炎の顔を立てて、正直に答える事にした。

「ああ、そのつもりだ。死ぬにしても、あんたやアレクシーナ様に恩を返してからだ・・・そう思ってるよ。」

「義理堅いんですね・・・」

紫炎は口元をスツと引いて薄い笑みを浮かべた。

「どうだろうな？正直、生きるのに何か目的が無ければ辛い・・・それだけの話さ。」

紫炎はリユーヤの話の静かに聞き、一拍置いてから意を決したように口を開いた。

「お気付きでしょうが、今、この紫炎教本部は多くの機関に見張ら

れています。」

「そのようだな。」

「その機関の目的にもお気づきですか？」

「いや……あんたの 能力や俺の 能力を狙ってる連中かと思
っていたが、ハッキリとは分からないな。あんたは知ってるのか？」
蠟燭の揺らぎが、紫炎の顔に影を落とす。

「確かにそれもあるでしょうが、大半の機関は違う目的で見えていま
す。あなたや私がリーン・サンドライトのように手に負えない危険
な存在かどうか？手を組むべきかどうか？それを見極めているので
す。もちろん、私達を殺す事もその選択肢に入っていますが……

……」

「見張っている？」

「そうです。大きな力を持った者は味方でなければ敵ですから、そ
の興味は大変なものでしょう。特にある機関は……」

「？」

「あなたが手に入れた宝珠の力を狙っています。」

「それだ……俺はそんな物はどこにも持っていません。」

「「それ」が、必ずしも目に見え、手に触れるとは限りません。

宝珠はあなたの中にあるのです。」

「……よしんばそうだとしても、俺の一番の願いだった
リーンは……願ひ事がなんでも叶うって言うのは言ひす
ぎだ……」

「そうですね、一定の物理限界、時間的な限界は確かに存在します。
ですが……あなたの手に入れた力はやはり巨大なのです。」

紫炎は静かにそう言った。

第3話「予知者」

「その力を狙う連中がいるって事か……」

「それだけではなく、あなたと協力し合おうという人達、あなたを利用しようとする人達もあなたに接触を求めてくるでしょう。」

リユーヤの呟きにた声に、紫炎は静かに答え、続けた。

「既に、私の所にもあなたと引き合わせるようにと、幾つかオフア
ーがありました。」

「俺を売る気か？」

リユーヤは疑い深げに言った。

「そのようなつもりは毛頭ありません。ですが……あなたに
必要であると思われる人物には引き合わせてます。」

「俺は、そんな面倒な事はしたくない。」

紫炎は目を伏せ、静かに力強く言葉を発した。

「前にも言ったかもしれませんが、あなたは世界に関わる非常に強
い運命の中にいます。リーン・サンドライトの時のような悲劇は繰
り返されるべきではない。そうは思いませんか？」

「それはそうだが……俺が世界の命運に関わるというのがど
うしたって信じられない……アレクシーナ様ならば分かるけど、
俺の三文能力を当てにする連中がいるとはどうしても信じられない
……」

「ならば、御自分の目と耳で確かめられるといいでしょう。」

紫炎がそう言うと同時に、リユーヤの後ろの扉が開いた。鈴と鋼
がおり、その間に一人のブロンドの髪の女が立っていた。

「このお嬢ちゃん達が扉を開けてくれたけど、お邪魔してもよろし
いのかしら？」

ブロンドの髪の女は鈴と鋼に一瞬目をやり、その後に紫炎に目を
向けた。

「どうぞ……今話していたあなたに接触を持ちたいという人の

一人です。名は……」

「ビルヘルミナ・レイナード、F国所属の仕官よ。」

ブロンドの髪の方はそう言った。目鼻立ちの筋がクッキリとした彫りの深い美女だった。

「俺は、リユーヤ・アルデベータ……」

「知っているわ。リン・サンドライトの暴走を止めた男……違うかしら？」

「暴走したのはリンじゃない……と言ってもあんたには信じられないか……」

「いえ、信じるわ。リン・サンドライトにおこった現象はあなたの国だけのものではないわよ。世界中で「悪魔」や「天使」という存在が動き始めているわ。私の国でもね……」

「どこもかしこも 能力者の研究をやってるって訳か……それは天罰でも降るだろうさ。」

「お言葉だけど、実害が出たのは今の所あなたの国だけよ。」

ビルヘルミナは、取り澄ました顔でそう言ってリユーヤを少し苛つかせた。

「それは結構な事だ。うちの国も俺個人もその爪跡でボロボロさ。用件があるならまた今度にしてくれないか？」

リユーヤは冷たくそう言い放った。だが、それには嘘も含まれていた。クライ王国はアレクシーナの善政により、前にも増して栄えている。

「ビルヘルミナさん、何故あなたを含め多くの機関がリユーヤ様やアレクシーナ様に関わらなければならないか……それを説明して差し上げてはもらえませんか？」

紫炎が少し大きめの声で割って入った。

「俺は聞きたくないんだが……」

リユーヤが拗ねたような素振りと言う。

「いえ、聞いてもらわないと困るわ……最初はどこの国でも正確な予言をする奇妙な予知者が生まれたと喜び、また、その予

知にも悲しんだりしていたわ。正確な予知者を持った時の普通の人間の普通の反応ね。もっとも、どこの国にとつてもトップシークレツトだった為、お互いの予知をすり合わせる事がなかったの……・
・ところが……・実はそれらの国の全ての予知者……・厳密には悪魔憑き？天使憑き？かしら？は、近い将来の世界の滅亡を予言している事が分かったわ。」
リユーヤの背筋をスツと冷たいものが走った。

第4話「リユーヤの視線」

リユーヤは敢えて冷めた目付きでビルヘルミナ・レイナードを見詰めた。

「それは、それで対策を立てていく事になっているのだけれど、その中で妙な事が起こったわ。」

ビルヘルミナはもったいぶり、一度喋るのを止めた。リユーヤはあくまで冷静な面持ちを崩さないし、紫炎は静か過ぎる程静かだった。

「それは……」

ビルヘルミナは再び一拍置いた。

「リユーヤ・アルデベータ、あなたが生きてる事よ。」

リユーヤは腕を組んだまま冷静に聞き返す。

「どういう意味だ？」

ビルヘルミナが静かに語りだす。

「多くの国の「予知者」達が、あなたの死を予知し、その後のリン・サンドライトの破壊を予知していた……」

リユーヤの表情が変わる。

「だけど、死んだのはリン・サンドライト、そして破壊も小規模で済んだらしい……単に「予知者」が外したとは考えられない。何故なら、リン・サンドライトの事もリユーヤ・アルデベータの事も、「予知者」が喋らなければ、我々は知りもしない事だったのだから……」

「俺は……」

リユーヤが口を開く。だが、喋るのはまずいと理性が止めた。かわって、紫炎が重い口を開いた。講堂の中を涼しい風がかけぬけた。「あなた方は死の運命を弾き返し、結果的にリン・サンドライトを救った……命までは救えなかったのですが……リユー

ヤ・アルデベータに破滅の運命を避ける希望を見た………
ういう事ですね。」

「御名答よ。さすがは日本の誇る 能力者ね。」

「お褒め頂き恐縮です。」

「その前に聞きたい。」

紫炎がスツとリユーヤに目を向ける。

「俺が死ぬ運命だった………そう言ったな。」

「ええ。」

リユーヤはこの女に余計な情報を与える可能性を考え、止めた言葉
を再び口にした。

「そして、お前は俺の死は言っておきながら、リーンの死について
は言及を避けてる。もしかして………」

紫炎が覚悟を決めた表情をした。

「死ぬのはリーンではなく、俺だったという事か？」

「我々の元にいる「予知者」の話によるとそうだわ。」

ビルヘルミナがそう答え、リユーヤは視線を紫炎に移した。

第5話「静かな声」

「紫炎……あなたはリーンが死ぬと言った……それは、あなたが関与したからこそ……そういう事か？」

リユーヤは静かな視線を紫炎に送った。紫炎は相変わらず無表情のまま、リユーヤの視線を受けている。

「私の調べた限りでは」

紫炎の答えを待たずビルヘルミナが口火を切った。

「他国の「予知者」達も、リユーヤ・アルデベータの死とリーン・サンドライトの暴走を予知していたわ。違うのは紫炎……あなたの予知だけ……そして、あなたの予知だけが当たったわ。世界の破滅が予言されている中で、この事は凄く重要な意味をもつわ。」

紫炎は相変わらず、静かに聞くだけで、何も答えようとはしなかった。

「世界の破滅なんて俺にとってはどーでもいいんだ。あなたが、俺にリーンを殺させるように仕向けた。それが事実か、俺は知りたい。」

紫炎が顔を上げ、掲げられた明かりの方を見詰め、静かに口を開いた。

「あなたが行かなければ、リーン・サンドライトは自分の意思を持たない「闇の物」の操り人形となっていたでしょう。それを生きていると言うのなら、あるいは私が関与したせいでリーン・サンドライトは死んだのかもしれませんが。」

「そうね。私を知る限り、リーン・サンドライトは恐ろしい破壊の使者になるところだったわ。こう言っただけ、リーン・サンドライトのせいで何千何万の命が失われるところだったわ。それを僅かな犠牲で止められたのだから、文句を言うのは筋違いだと思う。」

わ。」

「そうだな・・・あの時点ですら死者は50名を超えていた。重軽傷者に至っては1000名を超える。例えリーンが元に戻った所で、ろくな結末は待つていなかっただろうさ・・・だが・・・俺の手でリーンを殺させたのなら、それは許せない。」

「無茶を言わないで、リーン・サンドライトは核以上の能力を手に入れていたのよ。特殊な能力を持ったもの以外、誰が止められたというの?」

ビルヘルミナは紫炎をかばった。だが、紫炎は落ち着いた様子のままリユーヤに応えを発した。

「よいのです。リユーヤ様が、私を責めなくなる気持ちは充分すぎる程分かりますし、私ももっと出来た事があるはずだと、悔いしています。」

「分かってるさ。誰にもどうしようもなかった。あんたはあんたで最善と思える事をやったんだ。俺が記憶を失った事。それが致命的だった。そうなんだろうさ。」

「私から申し上げれる事はありません。リユーヤ様も出来る限りの事はやっただけです。最善に近い選択肢を選んだとしても、運命を変えるなどという大それた事はやはり難しいのかもしれない。私には分からない・・・。」

紫炎は明かりを見詰めながら静かに答えた。

「そうだな。誰が誰を責めようとも過去は変わらない。そして死んだ人間は決して生き返らない。それだけは事実だ。あんたも責任を感じている。それは俺にも分かっているんだ。」

リユーヤは少し落ち着きを取り戻し、強い口調でそう言った。

「いい覚悟ね・・・。さすがは能力者。そこで本題に入りたいのだけど・・・。」

ビルヘルミナはまた、一拍置いた。もったいぶった喋り方をするのが癖になっているのだろうか?リユーヤはそう考えた。

「あなた達に我々の国にきてもらいたいの。」

ビルヘルミナは透きとおった青い目を輝かせ、リユーヤと紫炎を交互に見詰めた。

第6話「4人目の能力者」

「仮に俺達があんたについて行くと行ったところで、そうすんなりここを出れるかな？」

リユーヤは静かで力強い声でそう言った。ビルヘルミナ・レイナードは輝かせた瞳を閉じ、軍人らしい冷めた目付きに戻った。

「問題はそこだわ。あなた方が自国以外のどこかの国と接触を持てば、ここを見張ってる連中の一部は過激な行動に出るでしょうね。」

「いや、あんたが俺達に接触する事で、既に他の連中も動き出しているさ。特に日本人ならこの教団に入り込む事もたやすい……そうだろ？紫炎？」

リユーヤは意味ありげに紫炎の方に目を向けた。

「……そうですね……今も物陰からここを盗聴している者もいます。」

「それで、どうするつもり？返事を聞きたいわ。」

ビルヘルミナ・レイナードは、軍人らしい厳しい目を二人に向けた。

「ビルヘルミナさん。我々もF国の思い通りにする訳にはいかないのですよ。」

開け放たれた講堂の扉の向こうに、20歳くらいの日本人の女性が立っていた。

「誰？」

ビルヘルミナがそちらを向いて言い放った。

「水無月 小夜子……表向きはこの紫炎教の信者、本当の身分は内閣調査室特別部隊の、部員よ。」

水無月 小夜子と名乗った女は漆黒のロングヘアをたなびかせ、凜とした表情を3人に向けた。

「只者じゃないとは思っていた……紫炎は知っていたんだろ
うが……」

「泳がせて置いた方が実害が少ない。そう判断しての事でしょう。」

小夜子は静かにそう言い、紫炎は沈黙で答えた。

「我々が接触を持つ事を聞いて、あなた達も黙っていられなくなつた？そういう事かしら？」

ビルヘルミナは刺すような視線を小夜子に向けた。

「こういう事は早い者勝ちという訳にはいかないもの……彼らを今日本から出すわけはいかないの。」

小夜子はあくまで冷静な口調だった。

「俺は、好きな時に好きな所へ行く……止めたければ腕ずくでやるんだな。」

リューヤはあえて挑発するように言った。小夜子の体から滲み出るオーラが、リューヤを挑発的にさせていたのだ。

「そうさせてもらおう……」

小夜子が懐から短剣を抜き出した。

「殺しても止める？そういう事か？」

リューヤも懐中から銃を取り出した。護身用の銃の為、口径も小さく装填できる弾数も少ない。今、銃に装てんされている弾の殺傷力は小さかった。模擬弾に近く、人を殺す程の殺傷力はない。

「知ってるかもしれないが、この銃の殺傷力は低い。当たっても死ぬ事はないだろうさ。」

小夜子は静かに短剣を構え、ゆっくりと口を開いた。

「こんな実験を知っているかしら？発射された拳銃の弾と日本刀では日本刀の方が強い。そこそこの刀で、3〜5発の弾を受けれるわ。同じ場所で受けなければ、耐久力もつと上よ。」

「それも、拳銃の弾を見切る腕と、それを支える筋力があつての話だろ？そんな人間は多くはいない。」

リューヤと小夜子の間に緊張感が走る。静謐な空気が二人の殺気を受けて放電をはじめめる。意を決した小夜子の口が開く。

「でやあ……」

小夜子がまっすぐリューヤの方へ向かって走った。リューヤが銃

を放つ。

信じられない事に、小夜子は拳銃の弾を切って弾道をそらした。破片が小夜子の頬をかすめ、血が流れ落ちる。

やはり、能力者が

リユーヤがそう思った時には、小夜子はリユーヤの懐に入り込み、短剣をリユーヤの首筋にあてていた。

「チエツクメイトよ。」

どこかで聞いた台詞だった。ミハエル・コーターと最初にあつた時に聞いた言葉だ。だが、あの時とはリユーヤも違っていた。小夜子は、左から来る弾丸の気配を感じ、サッと飛びのいた。

「能力者が……一体、世界に何人こんな能力者がいるつてんだ!!!」

リユーヤは叫び、また、弾丸の気配を小夜子に向けた。小夜子がかわす方向へリユーヤは移動し、小夜子の後頭部に銃口をあてた。

「チエツクメイトだ。」

リユーヤが口にし、小夜子が剣を捨てる。

「私の負けだ……だが……日本から出国は出来ないよ……」

「あんたが、見張りについてくればいい。俺は、この世界で何がおこっているか知りたい……リーンにとりついていた存在の事も、俺達、能力者が何故この時期にこんなにいるのかも……」

「それを知ってどうするの?」

「リーンの裏にいた、あいつらをこの地球から追い出すのさ。」

リユーヤは静かで力強い口調で言った。

第7話「黒い影」

「では、各国も了承済みだという事ですか？」

水無月 小夜子は、端整な唇を少し曲げてそう言った。

「そういう事になるかな。F国に力を奪われるくらいなら、我々の監視がついていた方が良いという見解なのだよ。よく言えば我々の国は信頼されている、悪く言えば舐められている……そういう事だな……」

「特にキリスト教圏では騒ぎが大きいと聞きますが、それも関係しているのでしょうか？」

「君が詮索すべき問題ではないと思うが……ね。」

「は、失礼しました。」

「君のこれからの任務はリューヤ・アルデベータの護衛と監視だ。」

彼らがF国に行くというならば君も行きたまえ。F国もしぶしぶだが了承している。」

「紫炎……矢口 涼子は、F国にはいかないそうですが……」

「既に報告は聞いている。そちらの件は問題ない。彼女の監視には他の適任者をあてる。君は、リューヤ・アルデベータの身の安全を守りながら、最悪F国の勢力に彼が取り込まれるようなら彼を抹殺する事だ。……リューヤ・アルデベータに破れたらしいが、出来るかね？」

「同じ目晦ましを再び通用させる気はありません。」

小夜子は凜とした瞳を部長に向け、そう言った。

「ならば、頼むぞ。」

「は！」

「行きたまえ。準備は全部整っている。」

「は！」

水無月 小夜子はそう言って敬礼し、部屋を出て行った。

その直後、部屋の明かりが消える。

部屋に一人残った部長はビクつとした。

「中々の名演でしたよ。山口部長殿。」

部長一人しかない部屋の中で別人の声がした。

「君に言われるまでもなく、我々も最善を尽くすさ。」

山口は静かに言った。

「私の指示がなくてもあなたは、小夜子をリユーヤに同行させたか？」

「そうだ。」

山口は力強く答えた。

「あなたの考えている事は分かっている……予知を外させたリユーヤの力を成長させ、我々に抵抗させようというのだから？」

「そんな事は考えてはおらんさ。」

「ふふふ……安心するがいい。リユーヤには成長してもらおう。」

今の彼では役不足だからね……」

「お前達は一体何を企んでいる？」

「君達に知る権利があると思うのかね？ たかだか、国という概念に縛られる君達に……」

「どこの国の者でも、多少は国という概念に縛られるものだ。」

「せいぜい協調してみるがいいさ。君達の悪足掻きを楽しみにしているから……」

その声を最後に、山口の周りから気配が消えた。山口はハンカチを取り出し、額に流れる汗を拭った。

第8話「小夜子とリユーヤ」

リユーヤとビルヘルミナと小夜子はF国行きの飛行機に乗っていた。日本を離れ、F国へ向かう三人の胸中はそれぞれだった。

3人の目的はそれぞれ違う。ビルヘルミナの目的はリユーヤをF国に協力させる事だったし、小夜子の目的はリユーヤをF国に所属させない事と他国で起こる怪現象の情報収集だった。リユーヤの目的だけが、二人とは大きく違っていた。リユーヤの目的は、能力者の背後にある存在を暴く事と、己の運命に対する疑念を晴らす事だった。クライ王国の制約を受けない訳ではないが、他の二人が国の命令を受け大きな忠誠心によってそれを遂行しようとするのに比べ、リユーヤの目的は私的な面が強かった。

「日本はよくあんだのような 能力者を、一時でも手放す事に賛同したものだな。」

リユーヤは窓から見える上空からの光景をみながら、隣に座る小夜子にそう言った。

「それだけ、お前が重要な人物だと言う事だ。お前の護衛……そして場合によっては抹殺する事……それが私の受けた命令だ……」

小夜子は前を向いたままそう言った。

「なるほどな……場合によっては危険分子を排除する。そういう事か……」

「そういう事だ……お前も心して自分の行く道を選択する事だ。私も出来ればお前を生かしておきたい……」

小夜子は鋭い目付きのまま、前を見詰め静かにそう言った。

リユーヤは小夜子の方を向いて、目を細めた。

「何故、場合によっては俺を抹殺すると告げる？そういう時が来たら黙って俺の寝首を掻いた方が早い……任務遂行の障害になる……」

小夜子は前を向いたまま、口元を緩め少し笑った。

「そうね。何故私が、お前にそれを告げたのか……私にも謎だ……」

そこまで言つて、小夜子は再び口元を引き締めた。

「私はお前とは正面から決着をつけたい。私の願望か……甘いな、私は……」

「……あなたは不思議なオーラをしてる。苛烈で激しい反面、奇妙な温かさを感じる……あなたは、あなたが思つてる程、歯車に徹しきれていない……そう感じる……」

小夜子がリユーヤの方を向く。

「いつから、占い師に職業変えしたんだ？リユーヤ・アルデベータ……自分の最愛の者を自らの手で殺した男の言う事とは思えないな。」

リユーヤはあからさまな不快感を顔に出した。

「ついてくるつもりなら……二度とリーンの事を口にするな……」

「お前も私の詮索などやめる事だ。私は任務を遂行する……それだけだ……」

小夜子はそう言つて、再び前を向いた。そして小さく呟く。

「お前も私も、普通の幸せなど望むべくもない人間だ。」

リユーヤも再び窓の外の景色に目を向けた。

……普通の幸せなど望むべくもない人間……そうなのかもな……

リユーヤはそう心の中で思い。リーンを撃つた瞬間を思い出した。自らの手で最愛の者を殺した人間……小夜子の言う事に間違いはなかった。その記憶のフラッシュバックが心臓を鷲掴みにされたような激情をリユーヤの中に駆け巡らせた。いや、実際に心臓を鷲掴みにされたような肉体的な苦痛が伴った。強烈な思いは肉

体そのものにも影響を与える。リーン・サンドライトを殺したと言う事実は、時間が経ったとはいえ、リユーヤの中で激しい心理的外傷として残っていた。泣けど叫べど戻らないリーンの命を思い身が裂けそうになった。リユーヤはその感情を必死で押さえ、何食わぬ顔で窓の外を見詰め続けた。

「顔色が悪いようね？リユーヤ」

ビルヘルミナがそう言った。

「なんでもない。」

リユーヤはそう言って、自分の内面にある激情を必死で押さえ込み冷静な素振りを見せることに腐心した。

第9話「再会」

飛行場を出てすぐに、リユーヤと小夜子はある気配を感じていた。

「つけられてるな。」

小夜子が呟いた。

「知る人ぞ知るリユーヤ・アルデベータ様ですもの、尾行者くらいいるでしょうね。」

ビルヘルミナがカラカウ調子で言った。

「ただの尾行者とは違う。」

「そうだな。」

「私が調べる。Bの3ルートで行って貰えるかしら。後から追いかけるわ。」

「どうする気?」

「何者か確かめる。場合によっては排除する。」

「排除する?この国にきて早々問題は起こして欲しくないわね。」

「捕まえてあなた方に引き渡すわ。」

「了解。」

ビルヘルミナが電話を取り出し、小夜子が別方向へ動こうとした瞬間、リユーヤが声を上げた。

「待ってくれないか?この気配、覚えがある。恐らく……知り合いだな。」

「知り合い?」

ビルヘルミナが声を上げ、小夜子がフツと笑う。

「こんな所にまでついて来る知り合い……ね。」

リユーヤが振り返り、声を張り上げる。

「西城!コソコソしないで出て来いよ!」

サングラスをかけた巨漢が体を揺らしながら近づいて来る。小夜子が身構える。

「荒事はごめんだぜ。」

西城は巨体を揺らしながらそう言ってサングラスを外した。

「あんた、別の任務についていたんじゃないのか？」

リユーヤが皮肉っぽく言った。

「それはもういい。俺一人で手に負える問題じゃなくなった。それに俺は面が割れて日本にいられなくなったしな。」

「どういう知り合いだ？」

小夜子が口を挟む。

「クライ王国のエージェントの一人さ。」

西城はにこやかに言った。

「自分でエージェントと言うようじゃ、極秘任務は無理だな。」

リユーヤも笑顔の表情のまま言った。

「そういう事だ。名前の知れたエージェントの仕事なんざ、外交任務だけって事だよ。」

「あなたが西城 真治ね……」

ビルヘルミナが静かに言い、続けた。

「連絡は受けているわ。」

「どういう事だ？」

小夜子が油断の無い目付きのまま言った。

「リユーヤぼつちゃんのお守りを日本のエージェントだけに任せる訳には行かないって事さ。」

西城はひょうひょうとしていたが、隙を見せない目で小夜子を見ていた。

「つまり、こういう事か？日本のエージェントだけでは信用出来ないの、リユーヤの国籍のある国のエージェントが私同様、リユーヤの見張りに付く。そして、それは、国家間レベルでの了承事項。」

小夜子はそう言って構えをといた。

「まあ、そういう事だ。よろしくな。おじょーさん方、リユーヤ。」

西城は、自分が尾行していた悪ふざけに悪びれもせずそう言った。

第10話「セキュリティー」

リユーヤー一行は、関係者以外立ち入り禁止の看板のある門を抜け、白い小さなビルのような建物に向かった。少し煤けた感じのする壁で、小さな駅の前にある、古くなったビルを連想させる。

「着いたわ。」

ビルヘルミナ・レイナードがリユーヤーと小夜子の乗る後部座席に向かつてそう言った。車は二台出迎えにきていたが、リユーヤーから目を離すなという命令を受けていた小夜子とビルヘルミナが同乗し、西城は運転手一人と後続の車で3人の後を追尾した。

4人は車から降り、白い古びた建物の前に立った。

「随分と古めかしい建物だな。」

西城が不機嫌そうな顔で、建物を眺めた。

「外面はカモフラージュよ。中のセキュリティーは完全に近いわ。網膜スキャナ、監視カメラ、監視カメラは人の皮膚の状態から個体を識別出来るように出来ているわ。それとIDカード。ちなみに、あなた方のそれらの情報はあなた方の所属する国から頂いているわ。」

リユーヤーも西城同様、不機嫌そうな顔でビルヘルミナに質問を向けた。

「それで、ここはどこなんだ？俺達の国で言う 研究所か何かなのか？」

「違うわ。ここはF国情報局の拠点の一つ。私の上司と、この国の能力者研究機関の所長と、その上の責任者が待ってるわ。」

「まあ、いいさ、取りあえず入らせてもらおうか。」

リユーヤーはそう言って、ビルヘルミナを促した。

「そうね、詳しい話は上に聞いてもらうのが一番だと思うわ。」

ビルヘルミナはそう言って、古びたボロビルの一つ目の自動ドアをIDカードを差し込み開けた。

リユーヤ、小夜子、西城がそれに続く。

ビルヘルミナは、次の扉の前にある小さな窓口の受付に何事かを告げ封筒を受け取った。ビルヘルミナは封筒から三枚のIDカードを取り出し、三人に渡す。緑色でICチップらしき物がついている。「武器や、金属の類いはここで預けて。内部は持ち込み厳禁だから。」

三人は言われるがままに、それらをビルヘルミナに預け、奥へと向かった。

そして、少し広い場所に出て、エレベータに乗った。

エレベーターにもカードの差し込み口があり、ビルヘルミナはそこにカードを差し込み、番号を押した。

エレベーターは音もなく目的の階につき、止まる。

3人は、ホテルのドアより無機質なドアの連続を抜け、一番奥にある扉の前まで、ビルヘルミナに連れられていった。

ここにも、カードを差し込むところがついていた。覗き穴のようなものも扉についている。

「ここにさつき渡したカードを差し込んで、その網膜スキャンを覗いて。」

三人は、言われるがままに、カードを差し込み、片目を覗き穴に向けた。「セキュリティは面倒とワンセットだな。」などと、西城はぶつくさ言いながら、手順をこなした。

「入りたまえ。」

ドアの上についているスピーカーから声がし、扉のロックが外れる音がする。

ビルヘルミナが、「失礼します」と言ってドアを開けた。

その瞬間、リユーヤは何か禍々しいものを、ドアの隙間から感じた。

第11話「アルネシア」

「ご命令通り、リユーヤ・アルデベータ、他2名を連れてまいりました。」

部屋の扉を閉めるなり、ビルヘルミナが言った。

部屋には窓はなく、ベージュに塗られた壁が四方から7人を取り囲んでいた。蛍光灯に照らされ明るい感じを醸し出そうとしている雰囲気はあるが、その試みは失敗に終わっていた。窓がないせいか、室内には酷く圧迫された感覚が付きまとう。

正面に机を挟んで三人の男が座っている。机の上にはデスクトップ型のパソコンがあるだけで、余計な物は一切なかった。

「話が長くなると思うので、4人とも掛けてくれ給え。」

机の向こうの三人の中心に座る初老の男が言った。その言葉を聞いてリユーヤは、この面会の為に用意されたのであろう、二つの3人掛けのソファのうちの一つに座った。続いて西城が座り、小夜子が続く。ビルヘルミナはそれを確認してから、三人の男達に敬礼してから座った。

「ミスターリユーヤ。まずは、我々の国に来てくれた事を心から感謝する。」

三人の男達のうちの真ん中に座っている男が言った。

「どうも。俺にも目的があつて来た事です。あまりお気になさらずに。」

リユーヤは相手の視線を真っ向から受けてそう返した。

「私の名前は、ジーマ・アレクサンドライト。我が国の治安維持の長にあたる人間だ。こちらの、軍服姿の男が、イリヤ・デラート。軍事超能力の顧問だ。そして、こちらの白衣の男がシークラット・ネイビー。超能力研究所の所長だ。」

「どうも、リユーヤ・アルデベータです。」

リユーヤはそう言って軽く挨拶した。

「西城 真治、クライ王国諜報部の人間です。」

「水無月 小夜子。日本の諜報部のエージェントです。」
西城と小夜子が続けて挨拶した。

「長旅お疲れだろうが、早速本題に入りたい。よろしいかな？」

ジーマがそう言った。リユーヤが頷く。ジーマは写真を一枚胸から取り出し、机の上に置いた。

「リユーヤ君、この男を確保するか抹殺するのに手を貸して欲しい。」

「？」

「この男は、君の国で起こった 能力者が得たのと同じような能力を持っている。」

「！」「！」「……」

リユーヤと小夜子が驚き、西城は表情を変えなかった。

「そして、始末におえぬことに、自ら隠れる事を選んだ。」

「隠れているというならそう問題はないのでは？」

「………隠れている場所が問題だ。」

「というと？」

「表立っても危険なものだが、裏で 能力を使われる方が始末に終えない。」

もったいぶった言い方だと、リユーヤは思った。政治家と言うのは大概こんな喋り方をするのだろうか。

ジーマは顎の先をイリヤに向けて、先を言うように促した。イリヤが立ち上がり、リユーヤの元に写真を渡す。

「この男は、極右人種差別グループ「アルネシア」に入り込み、その中で着々と地位を築いている。我が国の恥ずべき団体なのだが、その男の 能力のせいで、アルネシアは肥大化してきている。今はまだいいが、この調子でいけば、いずれ国の政策にも影響を与えるようになると思われる。」

「国に与るの脅威という事か？」

「それですめばいいが、ドイツのナチスのように自らの優越性を確

かめる為に戦争を起こしかねない。」

「それは国内の問題だろう。俺には関係ない。」

リユーヤは苦虫を噛み潰すような表情で静かに言った。

「我が国を歴史の恥部にはしたくないのだよ。それに……能力者が関係しているとすれば、君にも無関係ではないはずだ。」

「能力者がどんな思想を持っていようが俺には関係ないな。国内の問題は自分達の問題だろう。自分達で解決すべきだ。」

リユーヤがそう言うといリヤは怒気を孕んだ顔つきに変わり、顔を真っ赤にして机を叩いた。小夜子が身構える。

「未来を予知され、我々の作戦は悉く失敗したのだ。その上、ヤツは悪魔の知能と能力を使い、罪の無い市民を次々洗脳しているのだ！」

「……あんたら詳しいが……アルネシアにスパイでも送り込んでいるのか？」

「どこの世界にもタレコミヤはいるのだよ。」

ジーマが静かに言い、続けた。

「あの男、ザルマ・アレクサンドライトは、私の息子であり、研究所の脱走者なのだ。」

「自分の息子を人体実験に差し出したというのか？」
リユーヤは責めるような瞳でジーマを見据える。

「あの男は、私の知らぬところで偽名と偽の戸籍を用意し、研究所に入り込んだ。そして「全ての人間を超えたい」という目的を持ち、実際に超えた……。正直、我々の手に負える存在ではない。」

「彼は、全ての人間に勝る事を第一と考え、我々の研究を利用し、「悪魔」と手を結んだのです。」

白衣の男、シークラット・ネイビーが眼鏡越しの視線をリユーヤに向け静かに言った。ジーマ・アレクサンドライトは真剣な面持ちでリユーヤを見て、白衣の男の後に続けた。

「私としては全てが公になる前に、ザルマを人としての生活に戻し

てやりたい。それが出来ぬならせめて人として死なせてやりたい。こう思う事は不自然な感情なのかね。」

「いや……自然な感情だよ。「悪魔」と手を結んだ男……少し興味がある。場合によってはカラクリが解けるかもしれない……」

リユーヤは誰に言うでもなくそう言った。

「何を言ってる？リユーヤ。お前は一国レベルの問題に携わるべきじゃない。場合によっては全世界の運命を背負う男なんだ。軽々しい事は考えるな。」

小夜子が声を大にしてそう言った。

「我々のリユーヤ君への依頼はここまでだ。一週間以内に結論を出して欲しい。詳しい事は君の答えがイエスだった場合に話す。取りあえず、一週間は観光でも何でもしてくれたまえ、もちろんビルヘルミナ少尉の監視付ではあるが……」

「少し、考える時間をください。」

リユーヤは静かにそう言った。

仮題「シャングリラ」第2章 重要人物群

本編もUPしてます。読んでくださいね^-^

クライ王国

アレクシーナ・クライ（元第三王女、現在女王）

リッター・フォーンフィールド（アレクシーナ護衛隊元大尉、現在少佐）

リユーヤ・アルデベータ（主人公 現在中尉 能力者）

リン・サンドライト（リユーヤの恋人 能力者 死去）

アルテイル公国

アルテイル・ヘン・ミュール（元女王、現在隠居、しかし国内の実質的権限の大半を押さえており絶大な権力を持つ）

アール・アール（大臣 私利私欲に走った為誅殺）

ロード・コーター（年老いた 能力者 現在病気の為療養中）

ミハエル・コーター（能力者 ロード・コーターの息子 リユーヤに能力者同士の戦い方を教える）

日本

紫炎（本名 矢口 涼子 能力者 能力者の中でも特に特異らしく未来を変えうる力を持つ）

西城 真治（裏のガードマン的仕事をしている。戦闘のプロとしての訓練も受けているツワモノ アレクシーナに恩がある）

佐藤 陽子（紫炎教に潜入していた。西城と同じくアレクシーナに恩がある）

水無月 小夜子（内閣調査室特殊部隊の一員と名乗るが、詳細は不明。高LVの能力者）

馬渡 鈴（紫炎教の信者の子供。紫炎の従者）

斉藤 鋼（同上）

山口 源蔵（水無月 小夜子の上司。詳細は不明）

F国

ビルヘルミナ・レイナード（F国所属の仕官と名乗る、階級、詳細は不明）

ザルマ・アレクサンドライト（アルネシア幹部 能力 能力を併せ持つ超人。その能力を優等人種主義に使い犯罪を行う。）

ジーマ・アレクサンドライト（ザルマの父。F国諜報部長官）

国籍詳細不明

リン・サンドライトについていた存在（未来の予知を行う。人間の肉体と波長が合えば『乗っ取れば』大きな破壊的力を使う事も可能。各国の 能力者のほとんどが、この存在の仲間と思われる物にとりつかれているらしいが、詳細背景は不明）

謎の人物（リユーヤが伝説の宝珠を取りに向かった直後、紫炎の前に現れる。小夜子の上司山口の前にも同様の人物が現れているが同一人物かは不明）

謎の声達（一番最初にリユーヤが夢の中で聞いた声。彼らが何者なのか、実在するのは一切不明）

第12話「物理限界」

用意された部屋はスイートルームで、ベットは四つ用意されていた。

「引き受けるつもりなのか？」

荷物を置くリユーヤに小夜子が静かに言った。

「分からないな。言われた通り一週間は観光して考えるさ。」

「引き受けるべきだと、私は思わない。」

ビルヘルミナもいるにも関わらず小夜子は続けた。

「連中はザルマとかいう男が、「悪魔」と手を結んだと言った。俺はその「悪魔」とやらの正体が知りたい。そう言った筈だ……」

「調査を続ける気なら、もっと安全な「悪魔」とやらに憑かれた能力者を相手にした方がいい……」

そう言った小夜子の言葉に西城が続けた。

「俺もそう思うぜ。言っちゃ悪いが、リユーヤ、お前は人類にとって重要な駒だ。出来れば危険な目にあわせたくねーな。」

ビルヘルミナは自国に不利になる二人の言葉を黙って聞いていた。「お前らの方こそ勘違いしてる。能力者は前みたいに安全なものじゃない。一瞬で本来の能力以外に、能力、それも通常では考えられないような能力を発揮する危険な存在に変わってるんだ。安全に見えるのはみてくれだけだ。最初から危険と分かってる方がやりやすい。」

「リン・サンドライトに関する報告書を見たが……」

小夜子がベットに腰掛、視線を床に落としたまま言葉を発した。

「あれを、本来の意味での能力と呼べるのか？」

「能力は、銃弾を避けたり手も触れず物を動かしたりする物理限界を超える能力を指すんだから、能力でいいだろうが、それがどんなに巨大でもな……」

西城が言った。小夜子が続ける。

「だからおかしいのだ、今までの能力と言えば、あくまで、人間その物の動きを補佐する物に留まっていたはずだ。あんな爆発的な力を発揮できるのはどう考えてもおかしい。人間の肉体に蓄積されているエネルギーを大きく超えてる。ありえない……」

「それは、悪魔とやらが力を貸してるからだろ？別に不思議な事じやねえじゃねえか。」

「つまり、こういう事か……」

リユーヤが荷物を纏める手を止めた。

「リーンが兵士を吹き飛ばしたり銃弾を弾いたりするエネルギーは、あくまでも物理的エネルギーだ。にも関わらず、リーンがそれによつて酷く衰弱した様子はない。リーンは「核よりも恐ろしい力を手に入れた」と言っていたらしい。そこまでの物理的エネルギーをどこからどうやって調達しているのか分からない？そういう事か？」

「そういう事だな、能力の本来の意味は予知や透視などの時空限界を超える能力のはずだ。にもかかわらず物理的法則に従ったエネルギーを放出している。仮に「悪魔」が協力しているとしても、エネルギーの供給がなければ不可能だ。「悪魔」正確に悪魔と呼ばれてきた存在かどうかは知らないが、連中がそこまでの物理的エネルギーを持つているならば、なぜ、あくまで能力者にとりつく形をとる？やりたい事があるならば、自らの物理的エネルギーを利用し空気を振動させ実音……声を流し、自ら神をきどつてやりたい事をやればいい。」

「能力者にとりつく意味がないと……」

「そういう事だな。」

「それだけの力がありながら、何らかの事情があつて出来ないのか……」「悪魔」にとってはゲームに過ぎないのか……」

リユーヤはそう言った後、リーン・サンドライトの最後を思い出した。

リーンはゲームの為に死んだと言うのか……

「その謎を解く鍵がお前なんだ。そして紫炎……」
リユーヤが悲壮な考えにとり憑かれているのを打ち破るように小
夜子が言った。

「……そういう事か。なるほどな。」

西城は一人分かったように頷いた。

第13話「リユーヤの断罪」

「何がなるほどなんだ？」

リユーヤが目ざとく西城の言葉尻を捉えた。

「いや、お前らがそういう考え方をするのを聞いてそうかと思っただけだ。他意はねーぜ。俺は超能力だの悪魔だのなんてオカルトはどーも苦手だ。お前らみたいに、科学的には考えねーで全部いつしよくたにしてたんだよ。インチキか恐ろしい力か、一般の人間にやその程度の認識しかねーもんだ。」

西城は悪びれずにそう口にした。

「実際にある物を、常識とかいう物に縛られて存在そのものを否定するのは馬鹿げた事だ。少なくとも私やリユーヤはそれらの能力を实在するものとして捉えざるをえない。实在するのなら、証明できないまでも論理的仮説は立てられるはずだ。」

小夜子の目線あくまで下げられたままだった。

「西城、それとは別に……俺はお前に聞いときたい事がある。」

リユーヤが全ての作業をやめて西城の瞳を見据えた。リユーヤは西城に聞くべき事を思い出していた。小夜子とビルヘルミナの視線がリユーヤに向く。

「想像はつくがな……恐らく答えられんぜ……」

「それは、小夜子やビルヘルミナがいる場所では無理という事か？それとも俺には言えないという意味か？」

西城は困ったといった表情をして腕を組み、リユーヤの鼻の辺りに視線を移した。

「そのどちらでもねーな。いや、まあ、そういった事情も加味されるかも知れないがそれ以前の問題だ。」

「聞きたい事が分かるのか？」

「俺達の記憶の喪失の事だろう……違つか？」

「俺達？」

「違つんないが……」

「俺達つて事はお前もあの宝珠の山の事を覚えていないのか？」

「そういう事だ。アレクシーナ様に正確な報告をする時には綺麗さっぱり忘れてたのさ。その前日までは覚えていたはずなんだ……だが、きちんと報告しようと思った時にはきれいさっぱり忘れていた。手紙がなけりや夢だったって訳だ。」

「A-3に残した俺への手紙は覚えているのか？」

「ああ」

「心配いらないうつていたが……」

「そうだな。その時はそう思ったんだ。」

「リーンは死んだ。」

リューヤはそう言うてから、唇を噛んだ。

「残念だったな……本心からそう思つぜ。」

リューヤが西城に飛び掛り、西城の背広を破れそうになる程強く掴んだ。

「何が心配いらないだ！お前らが泰然と構えてる間に、事は進んでリーンは死んじまつた！」

リューヤの目には涙が浮かんでいた。

「すまない。」

それが八当たりだと分かっているても、リューヤは自分の感情を押し留める事が出来なかった。紫炎の言葉によれば、記憶に封鎖を掛けたのはリューヤ自身であり、その結果にもっとも重い責任を持つのが自分自身である事を頭では理解していた。だが、最愛の者を失った悲しみと怒りは行き場を求めて常にリューヤの中を駆け巡っていた。

西城にもその悲しみは痛いほど分かった。だから、西城はあえて反撃にうつらなかつた。

リューヤはスツと西城の胸元から手を引いた。

「あんたに謝ってもらっても仕方ない……これは、俺と「ヤツラ」の問題なんだ。」

リユーヤは西城から目を逸らし、残る2人とも視線の合わぬ方向に視線を移した。

「だが、リユーヤ、俺達に関与してるのは「悪魔」だけじゃねーそれも事実だ。俺達の記憶を消した存在。いや、お前は別かも知れんが、俺達に何かを教えた存在。そういった存在もいるって事だ……」

西城は襟元を正しながら静かに言った。リユーヤを励ますつもりだった。

「神か……」

小夜子が呟いた。リユーヤはその言葉に過剰に反発する。

「「神」だと? 「神」がいるなら、何故リーンは死んだ。何故、連中の存在を許す……俺達人間をおもちゃにしてるってのかよ!」

「「神」が全能でないか、他になんらかの意味があるか……私達に知るすべはないわ。定められた運命の中で必死に足掻く以外、私達に出来る事なんてない。」

この部屋に入ってビルヘルミナが初めて口を開いた。

「あんたも薄々気づいてるんだろ。予知が出来るって事がどういう事か。」

リユーヤが吐き捨てるように言った。

「全ての未来は決まってるって、我々はその上をなぞっているに過ぎない。そういう事だろ。」

小夜子が静かに言った。「神」とやらがあざ笑っているようだった。いや、少なくともリユーヤにはそう聞こえた。

「上等だ!俺はリーンを死なせた存在を許さない。「神」だろうが「悪魔」だろうが絶対に償わせてやる!」

第14話「この地に生きる者」

そう言い切ってリユーヤは、拳を壁にぶつけた。

「落ち着け。リユーヤ。」

西城の言葉を聞いてリユーヤは、手を額にあてた。

「頭を冷やして来る。」

リユーヤがドアに向かう。

「待って！」

ビルヘルミナがそう言っただけを追う。小夜子と西城がその後が続く。

リユーヤは部屋を出て、エレベーターの前で足止めをくらった。

一番最後になった西城もエレベーターに乗ることが出来た。

「頭を冷やすのは賛成よ。でも、我々にもあなたを守る義務がある事を忘れないで。」

「俺は一人になる事も許されないのか。」

リユーヤは吐き捨てるように言った。

「当たり前だ。お前は自分を軽く考え過ぎてる。少しは立場という物を考える。」

小夜子は強い口調でリユーヤを責めた。リユーヤは誰とも視線を交えず、エレベーターのドアを見詰める。エレベーターが一階のロビーに着き、ドアが開いた。

リユーヤがロビーから玄関へと向かう。

「どこに行くつもり？」

「さあな、俺の足に聞いてくれ。」

リユーヤが足早に歩く後に、ビルヘルミナと小夜子が続く。西城はフロントに鍵を預け、走ってリユーヤの後を追う。

「そっちは……」

リユーヤが角を曲がるうとすると、ビルヘルミナが声を上げた。

路地を曲がるうとすると数人の子供が座っていた。リユーヤは子供の顔を見て驚いた。全員の片目が白い。

「なんだ………」

「闇医者の手によって角膜を取られた子供たちよ。」
ビルヘルミナが答えた。

「生きた人間から角膜を取ってるってのか！」

西城が声を上げた。

「角膜や臓器は高値で売買される。子供を攫っては死なない程度に臓器を奪っていくシンジケートがあるの。」

「……この国にもそんなものがあるのか……」

小夜子が静かに言った。

「アルネシアの資金源のバックにそのシンジケートがある事は分かっている。そこまで掘んでいても、ザルマのせいで主犯格は国外逃亡。相変わらずこんな事が繰り返されてるわ。ザルマが先読みをするせいで我々は常に後手に回って、このシンジケートを壊滅出来ない。」

リユージャが拳を握る。

「一週間も待つ必要はない……」

小夜子が諦めたような目で、目線を落とした。

「依頼を受けると伝えてくれ。」

第15話「小夜子の意思」

「日系でも我々の組織に入れるのだな……………」

白人の男がそう言った。

「そういうな、我々の活動を支援して下さってるアルフレッド家のたつての頼みだ。」

「元、軍人だそうだ。この国の体制が嫌になったとき。それで、グループを立ち上げたがうまくいかず、我がグループに入り、現体制派に天誅を下したいのだそうだ。」

「我々のバックアップが目当てか……………理想的なのは我々優良種族のみで支配階級を築く事だが、その為には現体制派を切り崩さなければならぬ。その為には劣等種族であるうと利用すればいい……………」

「ザルマ様の受け売りか？」

「そうだ。あの方の言われる事は理に適っている。」

「連中が政府の手先って事はないのか？」

「その為に三人の面通しだそうだ。」

「政府の手先ならそこで始末される。そういうわけか……………」

「まあ、あの方にはどんなに訓練を積んだ者でも無力だからな。」

白人二人はそう言って笑った

……………こんなに早くチャンスが来るとはな……………」

「こんなに早くチャンスが来るとはな。」

リューヤの考えを読んだ様に西城が言った。廃墟となった病院の待合室でリューヤ達は待たされていた。

「余程の自信家か、ザルマの能力というのが偽物か……………どちらかだな。」

小夜子は油断しない目でそう言った。

「高レベル 能力者二人を相手に勝てるという計算か？ありえねー
だろ。」

「さあな、リーン・サンドライト並みの力が使えるなら……」
「それでもリユーヤは勝ったぜ。」

「……油断は禁物だ。」

小夜子は鋭い目で下を向いたまま言った。

「まあな。」

「し！来るぞ……」

一人の彫りの深い男がコツコツと足音をたててリユーヤ達三人の
前に現れた。

「ザルマ様の準備が出来た。入れ。一号診察室だ。」

「三人一緒なのか？」

小夜子が不審気に聞いた。

男は見下すように鼻で笑い。口を開いた。

「三人一緒でなければ意味がないそうだ。」

「……畏か……」

「分かった。すぐに行く……」

小夜子が先頭に立ち、西城がリユーヤの後に続いた。前方後方か
ら不慮の事態が起こってもリユーヤを守るようにだった。

小夜子が扉を開け、最初に入る。続いて、リユーヤと西城が入る。

「ドアを閉めたまえ。」

暗闇の奥から声がした。西城が用心深く扉を閉める。いざという
時に逃げられるように鍵はかけない。

「さて、君達の死刑を始めよう。」

先程、前方から聞こえていた声が突然背後から聞こえた。

三人は、バツと前方に飛び転がって、構えた。

リユーヤの足元に何かがあたる。感触に覚えがあった。

「とりたまえ、君達と私の技量がどれ程差があるか、教えよう。」

男はそう言った。小夜子の前には刀、リユーヤと西城の前には拳
銃が置いてあった。

「……我々の転がる方向を予測していた？……いや……
……分かっていたのか……」

小夜子の背筋に寒気が走る。それを払うように小夜子はザルマと
思しき影に切りかかった。刀は空を斬る。

「……消えた……」

人が動く時に発される気の走りすら見えない。

「あんた、ザルマさんか？」

リユーヤの声が部屋に響く。

「そうだ。私がザルマだ。この世の悪しき種を破滅させ、優良たる
種を生かす使命を負った者だ。」

「今やつてる事がか？」

「ふふふ、さすがリユーヤ・アルデベータ。少しは分かっているよ
うだな。」

「本当の望みはなんだ？」

「優良種を残し、劣等種を排除する事。これ以上の望みが生物にあ
るといえるのか？」

「アルネシアはその為の駒か……」

「何言つてやがる、そんな事はアルネシアのやり口見てりや分かる
だろうが、今更何言つてんだリユーヤ。」

西城の言葉に小夜子が答えた。

「こいつの目的は人類の進化……ようするに、能力者によ
る新世界の構築だ……アルネシアの構成員ですらこいつに
とっては始末するべき存在なのさ……リユーヤはその事を確
認したのさ。」

「さすが、日本の誇る 能力者エージェント水無月 小夜子。見事
な解答だ……。どうだね、真の意味での我々の仲間にならな
いか？」

「我々？」

リユーヤが声をあげた。

「……ふん……。誰がお前らの仲間になどなるか！……」

・人類が進化しなければならぬ定めと言っなら、自然が淘汰する……我々能力者の感知すべき事じゃない。」

小夜子は吐き捨てるようにそう言って、剣を握る手に力を込めた。

第16話「リユーヤの死」

「君達はこの世界に飽いていないのかね。」

正面に捉えていたはずのザルマの声が後ろから聞こえた。

小夜子は、確認もせず背後の気配を斬る。

手応えはない。

「平凡な日常、膿んだ世界。変えたいとは思わないのか？」

ザルマは小夜子の背後に常に回る。

(早い……どういいう理屈でこれ程の動きが出来る？音速すら軽く超えてる……にも拘らず衝撃波がほとんどない……どうすれば……)

「リユーヤ、逃げる！！私達では勝てない！」

小夜子が叫んだ。

「殺す気ならとつくにやれてる……我々と君達の間で、何がしかの妥協点を見出したいのだがね……」

「ザルマ……」

リユーヤが落ち着いた表情で言った。

「古いぜ……」

リユーヤが抜く手も見せぬクイックドロでザルマを打ち抜く。

「古い？」

ザルマの声がリユーヤの背後から聞こえた。弾丸は命中していないようだ。

「古いとはどういう意味だ？」

「お前の考え方は過去の遺物だと言ってんだよ。少なくともここにいる俺達にそんな誘いは通用しねーてこった。」

西城が気を引く意味で言った。

「古いと言うより器が小さいな。選ばれたもんだけの世界で残りは皆殺しか？そんなアホな事についてく人間がどれだけいるってんだ？それに力だけでそれを成し遂げる為には莫大な力が必要じゃねー

のか？」

「我々にはそれだけの力がある!!!」

「それで、自分が優等種のもりだろうが劣等種とやらいなくなつたらお前はそんなかじや只の凡人だろ？それで、その中でまた再び劣等種と優等種に分かれて殺しあう・・・結果は見えてる。そんな事もわからないのか？」

リユーヤがこの絶望的な状況で軽口を叩く。西城にも小夜子にもリユーヤの意図は読めなかった。実はリユーヤ自身にもよく分かっている・・・

「生産力として残せという事か？必要ないな・・・」

「だいたい、お前の能力つてのは誰のおかげでなりたつてると思ってるんだ??そいつらに利用されてるって事が分らないのか？お前のその傲慢な自尊心に付込むのはさぞかし楽だつたらうよ・・・」

リユーヤがザルマに嘲笑を浴びせる。

「だ・ま・れ」

ザルマの顔が紅潮する。

「お前が何様のつもりでいるのか知らないが、お前はその程度の事も分らない。只のア・ホだ。」

クツクツクツク・・・フフフ・・・ハハハハハ

ザルマが笑った。

「なるほど、面白い、面白いな。この状況でそれだけの軽口を叩ける。お前は貴重なモルモットだ。いつまでその軽口が持つか試してやるうか？」

「くだらん事を考えると足元を掬われるぜ？やるんなら一気にやるんだな。」

次の瞬間、リユーヤは引き倒され、倒れた頭部にザルマの膝が入っていた。床と膝に頭部を挟まれ、リユーヤの意識は飛んだ。

「リユーヤ!!!」

小夜子と西城の声が重なった。

「ハハハ、軽口は実力と相談して叩くべきだといういい例だ……
……。さて、切り札を失った君達はどうするつもりだ？死ぬか？生
きるか？選べ……。」

第17話「覚悟」

・・・・・・・・このままではリユーヤは死ぬ・・・・・・・・
小夜子の感覚が捉えるリユーヤのオーラ（生体エネルギーの波）は、どんどんと失われていく。

間違いなく人が死ぬ時の現象だった。リユーヤが死ぬ・・・・・・・・いや死んだとしたならば、今、我々の取るべき行動は・・・・・・・・いや、死なせてはならない・・・・・・・・まだ病院に担ぎ込めば間に合うかもしれない・・・・・・・・

目まぐるしく頭が回るが思考は纏まらない。

「ほう、お前達の国は、そんな物を開発していたのか・・・・・・・・無駄な事だとは思うがやってみるがいい・・・・・・・・」

ザルマが西城に何か言ってる・・・・・・・・西城が何かしたのか？

「水無月！リユーヤを連れて逃げろ！」

無理だ・・・・・・・・出来るはずがない

「早くしろ！ここは俺が食い止める。」

無理だ・・・・・・・・

西城が銃をザルマに向けて撃つ。当然のごとくザルマには当たらない。

「早くしろ！！」

ザルマがどれ程の力を持っているのか定かではない。しかし、銃弾が当たれば怪我はするし、斬られれば血も出る。そこに活路があるだろうか？小夜子の頭で僅かな可能性に賭けてみようという気持ちが生まれた。

「面白い考えだな？ミス水無月。後少し待ったほうがいい。その男の心意気を無駄にしない方がいいな。」

思考を読んだ？

「そこにいる劣等種は、未完成の薬を飲み込んで、一時的に我々優等種と同じ力を得ようとしているという事だよ。」

小夜子がチラリと西城を見た。クライ王国は人工的に能力者を開発していた。その技術があれば、一時的にそういう能力を持たせる事は可能なかもしれない。西城が服用してこの場に入り込まなかったという事は、何らかの副作用があるのは間違いないと考えていいだろう。緊急用に持たされていた薬・・・そういう事なのだ。何故なのかは分らないが、ザルマはすぐに西城を始末しようとしている。リユーヤの意識を一瞬で奪ったあのスピードがあれば、西城も小夜子も始末するのは簡単はずだ。なんのつもりかは分らないがそこがこの男の隙だ。

「そういう事だ。ただ、時間をかければリユーヤ君の生存確率は下がるよ。」

西城が発する気の質が明らかに変わった。その瞬間、小夜子は刀をがむしゃらに振り回しながら、リユーヤに近づいた。むやみやたらに刀を振り回せば、近づくのは簡単ではないはずだった。しかも、小夜子の振り回しは素人のそれではない。一度でも読みが遅ければ、当たり所によれば、死ぬ。小夜子はそうやってリユーヤの傍に近づいた。しかし、リユーヤを連れて行くには刀の振りを止めねばならない。ザルマがその隙を見逃すだろうか？賭けだった。

「ゲームオーバーだ。」

刀を止めリユーヤの体に手をかけた瞬間、背後でザルマの音が聞こえた。真後ろ、それは予測できた事だった。小夜子は刀を掴み、真後ろの標的に向けて払った。

側頭部に衝撃が走った。意識が一瞬飛ぶ。

死ぬ・・・

そう思った。

だが、致命傷となるはずの追撃は来なかった。

「水無月・・・水無月・・・」

朦朧とする意識の中で呼ぶ声が聞こえた。

「水無月！！！！！！」

小夜子はハツとして、首を振る。体のあちらこちらが痛い、だが、

側頭部以外の痛みはそれ程でもなかった。声の方を見ると、西城が、ザルマを後ろから羽交い絞めにしていた。

小夜子は素早く刀を取り、そのまま掛け声と共にザルマを突いた。今、西城の命を顧みる余裕はなかった。

西城諸共、ザルマを殺したはずだった。

だが、そこには二人はいなかった。あれ程の力があるのなら、西城ごとであろうと避けられないはずはなかったのだ。

西城を抱えたままでも凄まじいスピードだった。西城が振りほどかれていないのが、奇跡的だと思えた。

「この劣等種の虫けらの犬があ!!!!!!」

ザルマが西城を振りほどこうと力を込めていた。

「犬だろぅが虫けらだろぅが意地つてもんがあるんだよ。」

西城はそれだけ言うと、更に羽交い絞めにした腕に力を込めた。

常人なら首の骨が折れている程の力だった。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

ザルマが声を上げた。

ザルマの腕や首に凄まじい力が集まっていくのが分った。それに合わせ西城も更に渾身の力を込めた。

最後のチャンスに思えた。

小夜子が再び刀を突いた。

これで終わらなければ、全員死ぬ。そう思えた。

だが、刀は空しく空を斬っていた。

ドシンという音が聞こえた。

それは、西城が落ちた……絶望の音だった。

「ククク……フフフ……ハーツハツハツハ……」

「……僅かだが焦ったぞ……たいしたもの……」

「だが、もう終わりだ……お前らは殺す……」

ザルマはハッキリとした殺意を発していた。

第18話「復活」

ドカツ!!

これで壁に激突したのは何度目だったろうか……
挫けそうになる意識を何度無理矢理、奮い立たせただろう。
死ぬまで戦う気はあった。だが、もう体がついていかない。

西城が自分と同じ壁に叩きつけられた。さすがの西城もグロッキー
寸前に見える。

…… 鬨り殺しにする気だ……

「虫けらにも意地がある…… そう言ったな…… 劣等種」

ザルマがサディスティックな目を西城に向ける。

「だが、もう理解しよう。力を持った物が支配する、それが自然
の掟なのだ。劣った者は奴隷か死ぬか…… それが現実だ……
」

「糞でも食いな。」

西城は途切れ途切れの呼吸でそう言った。

「お前のような男に真理を理解させるにはどうすればいいか考えた……
」

ザルマの目が小夜子に向いた。

ザルマの考えが小夜子には読めた。最後まで反抗する者にどうい
う対応を取るか…… それは歴史の中で何度も繰り返されて来た
事だった。

「西城…… お前の大切な者を全て殺す…… もちろんお
前も殺す…… 私を止める者はいない…… 私はやると言ったら
必ずやる男だ。それを、この女を使って教えておいてやる。」

西城がゆっくりと立ち上がる。

「ほうその体で…… まだ立てるのか……」

西城はその後、小夜子の上に倒れるように覆いかぶさった。

「なんのつもりだ？ それで守っているつもりか？…… 先に自

分を殺せ？……そんな事になんの意味がある？私は、お前に
思い知らせてやりたいのだよ……どけ！！」

ザルマは西城の脇腹を足で小突いた。本気でやれば西城を蹴り飛
ばすくらいの事は簡単に出来るはずなのにやらない。それがこの男
のやり方だった。あくまで自分の優位性を確認したいのだ。最初に
わざわざ三人に武器を持たせた。

「どけ！！！！」

ザルマが力を込めた蹴りを西城に入れようとした瞬間、大きな気
が突然現れた。ザルマが、ガツと振り向く。

ガリッ

リユーヤの手が床を掴んだ。死んだように動かなかったリユーヤ
の手が動いたのだ。しかも、何か雰囲気が違う。

「馬鹿な！！死んだはずだろうお前は！」

リユーヤがゆっくりと立ち上がる。目の焦点があつていない。

「死に底無いがああああああああああ！！！！」

一瞬にして距離を詰めザルマの手がリユーヤの頭を掴んだ。

そのはずだった……

だが、気がついた瞬間にはザルマの手がありえない方向に曲がっ
ていた。

「うわああああああああああああああ」

リユーヤの口がゆっくりに動く。

「力に溺れ驕れるものよ……」

ザルマがキツとリユーヤを睨む。

「死ね！」

リユーヤは確かにそう言った。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

第19話「ジーマ・アレクサンドライト」

「では、リユーヤ・アルデベータのその発言の後、あの女は忽然と姿を現した……そう言うのだな？」

ジーマ・アレクサンドライトは、ビルヘルミナの報告を受けて動揺を隠せなかった。

「水無月 小夜子の証言によればそういう事になります。しかし、その状況も戦闘状況も正確な情報か自信がないそうです。心身ともに相当まいった状態であったのは間違いない、自分が正確な状況をハッキリ確認出来る状態ではなかったと自覚しています。」

「分った……下がっていい」「ハ！」

ビルヘルミナが退出した後、ジーマは椅子に座り、これからどうすべきか考えた。まだ、結果は出ていないが、あの女はリーン・サンドライトに似ていた。いや、似すぎていた。

死者の復活……

そんな事が本当におこりうるのだろうか？もし、それが事実ならば、リユーヤ・アルデベータとは何なのか？

神……

そんな事はない。どこかにトリックがあるはずだ。もし、神がいて、死者が復活出来るとしてそれが許されているならば、この世に死など最初からないはずだ。そもそも、リユーヤ・アルデベータが神、神に順ずる者だとするならば、そもそも何故、リーン・サンドライトを死なせた？何故、その場で救わない？リユーヤ・アルデベータはリーン・サンドライトの死で、一時廃人同然の暮らしをしていたという……それならば、リユーヤ・アルデベータはリーン・サンドライトが復活する事を知らなかったという事になる。そのくせ、リユーヤ・アルデベータにしか意味の無いリーン・サンドライトの復活を行った。当然、この事実は伏せられる。

リユーヤ・アルデベータは軍人なのだ。民間の宗教家とは違う。死者の復活など一般に知られても、困る。それも悪魔に憑かれていたとはいえ、重犯罪者であり、リユーヤの近い人物である。……
……全て、演技か？……全てを見通していながら、まるで知らない振りをする、させる。いや、リユーヤの表層的人格は本当に知らないのだろう。試されているのは我々か……
いや、死者の復活を行えるのが、何故神だと言える？もし、あの女がリーン・サンドライトだとしても、我々の敵か味方は死者の復活を行える技術がある……分るのはそれだけだ。それが神であるか悪魔であるか、それともイカレタエイリアンなのか地底人なのか、少なくとも今の我々にその技術が無い、それだけだ。まあ、地底人はさすがにいないだろうが……

そもそも、我々……いや「悪魔」と今便宜的に呼んでいる存在すら、リユーヤ・アルデベータという人物の演出に利用されているのではないのか？実際、「悪魔」は、悉くリユーヤ・アルデベータに負けている。そもそも、当たる予知を次々出していた連中が何故、リユーヤ・アルデベータとリーン・サンドライトに関する予知だけを外したのだ。演出にせよ何にせよ、彼らは何かをやらされているのは間違いない……それが何なのか知るには情報が少なすぎる。アルネシアは恐らく壊滅する。我々にとって有益かどうか判断する……それが政治家としての役目だ。そして、邪魔なら……しかし、殺しても復活するのだろう……
……彼らはそういう存在になってしまった……唯一の救いはリユーヤ・アルデベータがまるで子供のよう自分の感情で動く存在であるという事、自分の力を自覚していないという事だ。

この問題は、私には荷が重過ぎる。他に判断出来る人間がいるならば、そいつにやらせればいい。そいつが、リユーヤ・アルデベータの敵なら、彼が何者か、引き出すかもしれない。リユーヤが消える事になっても、それはそれでいい。自分が依頼したとはいえ、ど

ここに息子を殺されたという思いがあるのは事実だ。

形としては、リユータ・アルデベータが望めば支援する。そういう形でいいだろう。

「あの女がリーン・サンドライトだとしてだが……」

ジーマ・アレクサンドライトはそこまで考えて眩き、リーン・サンドライトと姓が似ているという偶然を考えた。

第20話「リーンの意思」

アレクシーナはかつて 研究所だった場所の一室に入った。
そこでは、ベットのの上に西城が横たわっていた。

「これは、アレクシーナ様」

西城が起き上がるうとするのをアレクシーナは手で制した。

「横のままでもいい。少し長い話になるかもしれないな。」

アレクシーナはベットの横にある椅子に腰掛けた。

「無茶をしたものだな……」

「リユーヤを守るのが俺の仕事ですからね。あの状況じゃ薬を使う
しかありませんでした。もっとも役に立ちもしませんでしたかね。」

西城はそう言って微笑んだ。

「能力者を人工的に作り出す薬……リーンの約束で研究
は放棄したのだがな……」

念の為に持たせた薬だった。短期間でその能力を引き出す為、後
遺症はかなり酷い。幻覚、幻聴の症状が出る。人為的に無理矢理そ
ういう力を引き出す為か、一般にそういう症状に使われる薬の効き
は弱く、ほとんど効かないと言ってよかった。西城にそういう説明
はした。だからいざという時以外使うなと厳命しておいた。

それでも持たせておいた事に間違いは無い。そういう時が来たと
自分で判断したら迷わず飲めと言った。自分を酷い人間だと思う。
どう言い訳をしても使う為に持たせたのだ。

「王女……いや、女王、くだらん事で悩まんで下さい。自分で
判断した事です。もし薬を使っていなかったら全滅していた事だっ
て十分ありえたんです。幸い症状も想像していた程じゃない。」

アレクシーナは微笑した。西城のこういう所に救われる。

「リーンの問題はどうなりました？」

「本物だな……DNAも記憶もリーン本人である事を示して
いる。」

「そいつあー良かった。リユーヤも喜ぶ。」

「いや、リユーヤには教えないつもりだ。」

「そいつあ．．．．．」

「幸いリユーヤにはザルマを倒した記憶もリーンを呼び戻した記憶もない．．．．．」

「やはり、リユーヤが呼び戻したと？」

「はっきりした判断基準はないが、リーンもリユーヤに呼ばれたと言っているし、詳細過ぎるF国の調書もそう言ってる。」

「やっかいごとを押し付けられましたな。」

「そういう事だ．．．．．リーンもリユーヤもサイジョーも我が国の人間だからな。筋は通る．．．．．しかし、通り過ぎる．．．．．

・一応機密扱いはするらしいが、責任はこっちに押し付ける形だ。」

「日本の対応はどうです？水無月は日本のエージェントですよ。」

「日本は少し、欲をかいてるようだ。サヨコをリユーヤに貼り付けたままだ。機密扱いにする事には同意してるがな。」

「リユーヤをリーンに会わせてやったらどうですか？」

「私も悩んだのだが．．．．．リーンにリユーヤに会う意思がない．．．．．会う意思がないどころか、ハッキリとリユーヤと会う事を拒絶している。」

「？どういう事です？」

「リーンはこの世の．．．いやあの世か．．．．．とにかくリーンはこの世界の事を知ったのだ．．．．．少ないながらあの世の事を覚えている。今、リユーヤに会う事はリユーヤの為にも自分の為にもならないと言ってきたかない。」

「そうですか．．．．．」

「それを事実かどうか確認する方法は我々にはないが．．．．．少なくともリーンは明らかに変わってしまった．．．．．能力も保持したままだが、「悪魔」の意思ではなく自分の意思で話す．．．．．想像に過ぎないが今のリーンはシエンに似ているのではないかと思える．．．．．」

「紫炎ですか……」

「サイジョー、お前が回復したらサトーと一緒にリーンに会ってみてはもらえないか？正直、私一人で全ての事を判断するのは難しい。」

「分かりました。私が回復しきらなかった場合は陽子だけでも行かせます。」

「頼むぞ」

アレクシーナはそう言って立ち上がった。そして部屋を出る時に、「一日でも早い回復を祈ってる。」と言って微笑んだ。

第21話「小夜子の心」

小夜子がリューヤの病室に一人付きっきりでいた。考える事は山のようにあつた。あの女が本当にリン・サンドライトなのかどうか、もしそうなら、リューヤは何者なのか？考えても分らない事だらけだった。リューヤが巨大な力を持っているのは知っていたが、死んだ人間をまるつきり別の場所に復活させる……そんな力まであるとは想像していなかった。

リン・サンドライト本人だとするなら、リンを構成する物質はどこから現れたのだろうか？宙から急に物質が現れる。そんな事はありえない気がした。本来無いものがこの世界に現れたとするならば、その歪はどれ程のものなのか？宇宙規模で見れば、地球上に電子の粒が一つだけ生まれたようなものだろうか？リン・サンドライトの死体はあるのだろうか？このクライ王国では土葬が習慣である。調べる事は出来る。恐らく、この国の諜報機関がやっているだろう。結果が知りたかった。

そして、今はともかくとしても、リューヤにリン・サンドライトの復活を告げるかどうか？世界の運命に関わるとまで言われている者の恋人の復活、それが何の影響がないとは思えなかった。

「小夜子？」

リューヤが目覚ましていた。

「なんだ？」

「いや、目が覚めたから、いるかどうか確かめただけだ。」

小夜子はフツと笑った。

「心配する必要は無い。私が死ぬか外されるか、お前が死ぬかまで私はお前の警護と監視につく事に決まった事は言つたる？」

リューヤもフツと笑う。

「リンがいなくなつてから……」

リューヤは小夜子と目を合わせない。

「俺は気弱になった……目を瞑って開くと誰もいない世界に取り残されてしまう……そんな夢を最近よく見る。」

「病院のベットについていけば、誰でもそんな感傷に捉われるさ。」
「かつて、リーンは死んだと聞かされていた。それでも俺はその事をそれ程考えもせず生きた。だが、リーンの生存を知ってリーンが死んだ後はその事ばかり考えていた。大きな何かを失った……そんな喪失感がずっと付き纏っていた。」

「俺は、この世界でこれ以上生きて何をするんだ……生きる意味もない……そう考えていた。」

「そうなのか？」

「だが、ザルマを倒し、アルネシアが壊滅していつてる事を聞くと俺にも出来る事があつたんだと思える。」

小夜子は壁を見詰めるリユーヤの横顔を見詰めた。綺麗だと思つた。

「リユーヤ……お前は優し過ぎる……この先、お前が本当に世界の命運を背負うと言うなら、この先、もっと嫌な物を見なければならなくなる。ザルマなどよりもっと老獪で、もっと醜悪な物も見なければならなくなる。その時は……」

私が支えよう……そう言いそうになった。自分がそんな事を考えていると、今初めて知った。

「その時は？」

「その時は……いや、その時はその時の話だ……お前が何を選び、どう決断するのか……それを見定め、お前が敵になるなら私はお前を殺す。」

殺す気などいつの頃からか消えていた。自分のかつての恋人を死なせてしまった事に苦しみ、臓器や角膜を奪われた子供の為に戦う決意をした。それを知った時から、自分はリユーヤを殺せない。そうなってしまうていた。

「そうならない事を祈ってるよ。」

「私に殺されたくなかったら……油断だけはしない事だ……」

小夜子は自分の中に起こっている化学変化に気付き、その自分の甘さを呪いたくなった。

「俺が間違えたら殺してくれ……」

リユーヤはそう言っつて小夜子の方を向き、微笑した。

「そのあとで反キリストが地獄の王となります。さらに最後の信仰によつてキリスト教のあらゆる王国が25年間にわたつて震え、不信心な者たちも同様に震えます。そしてもつと悲しい戦争があつて町や都市、城やすべての建物が焼かれたり荒らされたり破壊されました。純潔な血が大量に流され、妻たちや未亡人たちは凌辱され、乳呑み児たちは町の壁において引き裂かれます。地獄の王サタンによつてあまりにも多くの悪が成されるので、ほとんど全世界が破壊されて荒れ果てるでしょう。」

注 「アンリ2世への書簡」より 出サイト：ノストラダムスサ
ロン

仮題「シャングリラ」第二章 了

第21話「小夜子の心」(後書き)

一週間後くらいから第3章UPします
それでは、それまで〜

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5340c/>

仮題「シャングリラ」第二章

2009年3月24日10時39分発行